

知っておきたい半夏厚朴湯の 基本と臨床のポイント

加島 雅之 先生 熊本赤十字病院 総合内科 部長／内分泌代謝科 部長

出典 金匱要略

半夏厚朴湯の出典は、『金匱要略』(張仲景ら 3世紀初頭頃)であり、婦人雜病脈証并治第二十二に「女性で咽の中にあぶった肉片があるように感じる者は、半夏厚朴湯が治療する」と述べられている。

効能又は効果

気分がふさいで、咽喉・食道部に異物感があり、ときに動悸、めまい、嘔気などを伴う次の諸症：不安神経症、神経性胃炎、つわり、せき、しわがれ声

古典に見る半夏厚朴湯

『備急千金要方』(孫思邈 655年頃)

唐代の初期に完成した『千金方』(備急千金要方)に、半夏厚朴湯は「女性の胸がはり心窩部が堅く、咽がくっついたようにひっかかり、肉片があるような感じで、吐き出そうとしても出ず、飲み込もうとしても飲み込めないのを治療する方剤」と述べられている。

『三因極一病証方論』(陳言 1174年)

『三因極一病証方論』卷之八 七氣証治に、半夏厚朴湯は「七氣」(過度な精神的ストレスや情動に伴う症状)に対応する処方として「大七氣湯」の名称で記載されている。

『易簡方』(王碩 12世紀後半)

南宋を代表する処方集である『易簡方』に、半夏厚朴湯は「四七湯」(4種生薬構成の七気に対する湯剤という意味と考えられる)の名称で収載されており、七気の病態に派生した症状および咳や唾液が増えるなどの身体症状にも対応する処方であると述べられている。

半夏厚朴湯の方剤解説（図1）

半夏厚朴湯の効能は「理気降逆」「化痰」であり、咽喉部の違和感を中心とした気分障害や精神症状だけでなく、身体症状も治療できる処方と位置づけられている。

茯苓・生姜・半夏は、気を巡らせる作用に加え、化痰滲湿の作用を有している。さらに、厚朴・蘇葉は解鬱の作用を有しており、これらが一体となって効果を発揮する。このため半夏厚朴湯は、梅核気(咽頭違和感)や陽性化した精神症状(躁傾向)、咽頭に痰が絡み、それによって誘発される咳嗽、気滞が腹部に現れる腹部膨満感を治療する。

氣

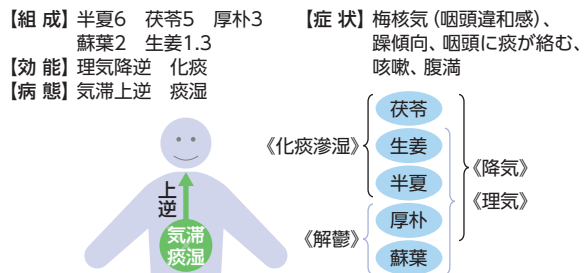
気は万物の基質と考えられているが、物質の側面よりも機能的側面が強調されている。生理学的には身体活動、エネルギーの一切を表しており、血や津液を体の中で巡らせ動かしていると考えられている。また、「こころ」の動きも気の動きの一つと考えられている。

心 (図2：次頁参照)

漢方医学では、「心」の生理作用を、「神志を主る」「血脈を主る」の二つに分けている。

「神志を主る」については、人間の高次機能・精神作用の根本は「心」がその出力の源になっていると考えられている。「血脈を主る」については、解剖学的な心臓そのものを想定している。

図1 半夏厚朴湯の方剤解説



知っておきたい半夏厚朴湯の基本と臨床のポイント

「思」(田+心)の「田」は小児の泉門を表しており、「心」から出力される「神」の気が脳に投影されることによって人間の精神活動が営まれていることを象徴している。

神 (図3)

人間の体を統合している「神」は、高度な統合・調節を行う気の特異形態であり、精神活動を行う主体である。神はさらに「神」「魄」「意」「魂」「志」に分解でき、五臓のそれぞれに担当があると考えられている。

気の病証 (図4)

気滞は、気の流通が阻害され、鬱滞した病態である。抑うつ症状や時間的・精神的要素で変化する疼痛、移動性の疼痛、脹悶感などの症状が出現する。

気逆は、気機の昇降が失調し、気が上逆する病態である。気逆が生じると、上半身に激しい症状が多くみられるようになる。

半夏厚朴湯は、上昇した気を降ろす作用を有する。

半夏厚朴湯の類縁処方との鑑別 (図5)

● 加味逍遙散

加味逍遙散は、肝の気滞と血虚を背景に、気が熱化したものを発散させる処方である。肝の気滞があるためにイライラや抑うつなどの情緒の異常が現れ、これが熱に変わるために易怒や興奮などの陽性症状が現れる。この背景には肝の血虚が存在していることがポイントとなる。

図2 心



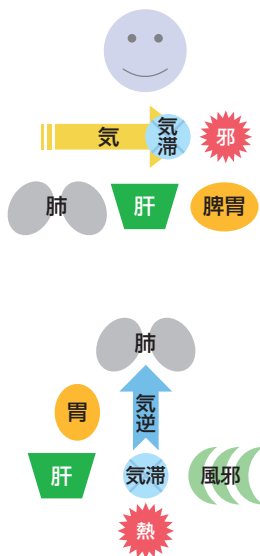
【生理作用】

- 神志を主る。神がやどる場所
- 血脈を主る。血を巡らせるポンプ

図3 神

- 高度な統合・調節を行う気の特異形態。
- 精神活動を行う主体。
- 五神論
- 心：「神」 意識清明さ、統括の「はたらき」
- 肺：「魄」 身体感覚・無意識の「はたらき」
- 脾：「意」 思惟する「はたらき」
- 肝：「魂」 自我、情緒の「はたらき」
- 腎：「志」 ある方向に継続する「はたらき」

図4 気の病証



- 気滞：気の流通が阻害され鬱滞した病態。情緒の抑うつ、運動不足や外傷、薬剤、各種の邪により引き起こされる。気の運動に強い影響を与える肝・脾胃・肺の病証も続発する。他の精気の運動の低下を引き起こす。

【症 状】抑うつ症状、時間的・精神的要素で変化する疼痛、移動性の疼痛、脹悶感など。

- 気逆：気機の昇降が失調し、気が上逆する。多くは気滞が背景にあり、熱邪・風邪に煽られて起こる場合がある。気の下降のペクトルを与える胃・肺、気の運動のコントロールを行う肝の病態に合併しやすい。

【症 状】上半身の激しい症状に多くみられる。肝気上逆ではめまい、易怒、卒倒、吐血。胃気上逆ではげっぷ、胸やけ、悪心、吃逆など。肺気上逆では咳嗽、呼吸困難（咳逆、喘満）など。

図5 半夏厚朴湯の類縁処方との鑑別

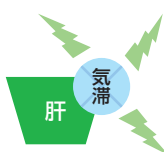
加味逍遙散



肝の気滞：イライラ、抑うつ
肝の血虚：肌・髪の色つや低下、月経量低下、眼の疲れ、筋痙攣
気の熱化：易怒、興奮などの陽性症状

- 肝の気滞と血虚を背景に気が熱化したものを発散させる。
- つまり、イライラと潤いの低下を背景に興奮や陽性の精神症状になっているものを発散させて除く。

抑肝散加陳皮半夏



肝の気滞：イライラ、抑うつ
内風：突発的な情動発作

- 抑肝散は、肝の気滞を背景に起こった内風（気の過剰運動）に使用される。
- つまり、我慢、イライラによって起こる突発的な情動発作、自罰的な性格傾向。
- 歯ざしり、レム睡眠障害。
- 抑肝散加陳皮半夏は気うつ（気の抑うつ傾向の強い気滞）の合併例に特に有効。

柴胡加竜骨牡蛎湯



肝火：イライラ、易怒
心に熱の影響：過覚醒、興奮、動悸、不安、焦燥感

- 肝の気滞が熱化したものが、心に影響している状態。
- つまりイライラや抑うつから生じた興奮性、陽性の情動反応と、不安や情緒の不安定性が生じている。

加味帰脾湯



心血虚：病的不安（予期不安）、熟眠障害
脾気虚：疲れ、消耗、エネルギー不足
肝の気滞：イライラ、抑うつ
気の熱化：易怒、興奮などの陽性症状

- 心血虚、脾気虚があるところに肝の気滞や熱が合併した病態に対し、心血と脾気を補い、熱を発散させる。
- つまり、消耗に伴いエネルギー不足と病的な不安や熟眠障害が生じる。

● 抑肝散加陳皮半夏

抑肝散は、肝の気滯を背景に起こった「内風」に用いられる処方である。さらに、陳皮・半夏が加わることで、気滯を除く作用がより強くなるため、気うつ合併例に特に有効である。

● 柴胡加竜骨牡蛎湯

柴胡加竜骨牡蛎湯は、肝の気滯が熱化して生じた興奮性、陽性の情動反応と、それが心に影響するために過覚醒が生じ興奮し、動悸が起こり、また大量に入った情報を処理できないため不安・焦燥感などが生じるような病態に適応する処方である。

● 加味帰脾湯

加味帰脾湯は、心血虚、脾気虚があるところに肝の気滯や熱が合併した病態に対し、心血と脾気を補い、熱を発散させる処方である。消耗や慢性的な疲労などの問題が背景に起こる病的不安感、熟眠障害にイライラや焦燥が混在しているような状況に用いる。

現代医療における半夏厚朴湯の臨床応用

● 症例1 80歳 女性、主訴：咳嗽、頭痛(図6)

本症例は気逆と弁証し、半夏厚朴湯を処方した。半夏厚朴湯の服用後3日で症状は半減し、3週間で諸症状は消失した。経過中、補中益気湯の服用で体調が悪化したが、補中益気湯は気を補い上に昇らせる処方であることから、気逆の症状が増悪したと考えられる。そのため、気の流れを改善し、下に降ろす半夏厚朴湯が著効した。

● 症例2 37歳 男性、主訴：吃逆(図7)

「運動すると爽快感がある」「咽頭違和感あり」はいずれ

も気の滞りを示唆していることから、本症例は気逆によって起こる吃逆と弁証し、半夏厚朴湯を処方した。服用後3週間で症状はほぼ消失した。クロナゼパムを漸減中止、半夏厚朴湯も漸減し、9週後に終診となった。

● 症例3 19歳 女性、主訴：動悸、呼吸困難感(図8)

本症例は気滯・気逆傾向と弁証し、半夏厚朴湯の2週間の服用で症状は改善した。2ヵ月後にイライラと抑うつが現れるようになったため肝風内動と診断し直し、抑肝散加陳皮半夏に変更したところ、服用後1週間で症状が改善し、意欲が湧き、前向きになった。

半夏厚朴湯は気の流れが停滞して上に昇る傾向になっているものを治療することから、その背景にある問題を治療する必要がある。本症例も、当初は気滯が前面に現れていたが、それを取り除くことで背景にあった肝風内動が現れたため、治療を切り替えることで諸症状が改善した。

図7 症例2 37歳 男性

【主 訴】 吃逆

【現病歴】 2ヵ月前からストレスのために休職、6週間前から吃逆が出現し、その後も間欠的に症状が持続した。複数の医療機関を受診し、頭部MRI、胸部CT、上部消化管内視鏡、腹部超音波を施行されるも特記異常なく、紹介受診した。

【現症・漢方医学的所見】 クロナゼパムの内服で症状は少し改善するも、増量するとふらつきが出現する。

柴胡加竜骨牡蛎湯、十全大補湯、呉茱萸湯は無効であった。

運動すると爽快感があり、吃逆が改善しやすい、咽頭違和感があると述べていた。

脈診：沈滑

舌診：白～やや黄色苔

腹診：心下痞硬あり

【弁 証】 気逆

図8 症例3 19歳 女性

【主 訴】 動悸・呼吸困難感

【現病歴】 夏頃から動悸と息苦しい感じが出現したり消えたりしており、症状が増悪傾向のため受診した。

【既往歴】 慢性副鼻腔炎、アデノイド過形成（1年前に手術）、月経周期が前後しやすい（当帰芍薬散を服用中）

【社会歴】 大学受験に失敗し、浪人生活にもなじめず、自宅にいた。

【現 症】 喉に物が引っかかったような違和感があり、眠ろうとするときに出現する。脈を強く感じたり、早くなるような胸部違和感を感じる、緊張しやすく細かいことにこだわりやすいというような症状があった。

【弁 証】 気滯・気逆傾向

【経 過】 半夏厚朴湯の服用で2週間後には症状が軽快したが、2ヵ月後にイライラと抑うつが現れるようになった。ストレスがある際に両側側頭部の頭痛が出現、また以前から歯ぎしりを指摘されていた。

脈診：弦脈、細

肝風内動と診断し直し、抑肝散加陳皮半夏に変更した。

図6 症例1 80歳 女性

【主 訴】 咳嗽、頭痛

【現病歴】 2ヵ月前から頭痛があり、以前より咳嗽が出やすかったが、3週間前から咳嗽があり、痰が絡むようになった。麻黄附子細辛湯の内服で下口唇が腫脹したが、疲れが原因と考えて補中益気湯を服用したところ、発汗と失神があり、以降咳嗽の増悪、毎日の頭痛がある。

【既往歴】 特記なし

【現症・漢方医学的所見】 胸部単純X線写真、頭部MRIに特記所見はない。咳嗽はむせかえるような感じがあり、顔の発赤はないが、のぼせる感じがある。

脈診：右脈 寸脈滑脈有力、関・尺脈無力、左脈 やや弦

舌診：舌胖大、白苔あり

腹診：心下痞硬、心下動悸あり

【弁 証】 気逆

知っておきたい半夏厚朴湯の基本と臨床のポイント

●症例4 84歳 男性、主訴：喘鳴、呼吸苦(図9)

肺の気をうまく呼吸に移すことができない肺の不全、腸管の気の流れが悪い、腑気が通っていないと考え半夏厚朴湯を投与した。半夏厚朴湯の投与とともに徐々に呼吸状態が安定し、腹部の張りも取れてきた。一時、院内感染で喘鳴が増悪したが、喘息治療で速やかに改善した。当初は寝返りをうてない状態だったが、半夏厚朴湯の服用後2週間頃には立位訓練などのリハビリもできるようになるほど、呼吸状態は安定していた。単純X線写真所見で当初、大腸を中心とする重度のガス貯留があったものが、改善傾向を示した。

図9 症例4 84歳 男性

【主 訴】喘鳴・呼吸苦(約4年前から)

【現病歴】以前に2ヵ月にわたって精査目的で入院したが、明らかな原因は不明であった。入院中は腹満が著明で、単純X線写真では大腸を中心とするような著明な腸管拡張、腸管内鏡面像を形成していたが原因は不明であり、治療困難のため療養型病院へ転院となっていた。転院先の病院で喘鳴発作が出現し、β刺激剤のネブライザーやステロイド静注、キサンチン誘導体静注など喘息の治療と酸素投与にもかかわらず再搬入となった。

【漢方医学的所見(入院2日目)】軽度の呼吸でも呼吸に喘鳴が出て低酸素血症が認められた。定期的なステロイド投与、β刺激剤の吸入でも効果は不十分であった。

問診：少し寒い、腹痛はない、体はきつくない

手足末梢：血色不良、冷感あり

脈診：やや数、有力

右 寸：滑/有力 関：滑 尺：沈

左 寸：実/やや滑 関：滑/やや弦 尺：沈

舌診：嫩、無苔、やや淡

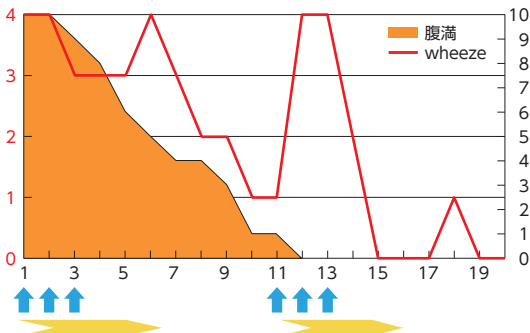
腹診：著明な鼓腸

【弁 証】肺気不宣、腑気不通

【経 過】

↑ プレドニゾロン40mg/6h

→ サルブタモールネブライザー/4h

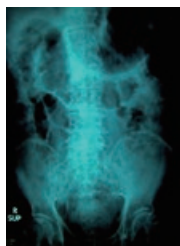


【単純X線像】

治療前



治療10日目



●半夏厚朴湯の臨床研究

1. FD(functional dyspepsia)¹⁾：

FD患者30名に半夏厚朴湯を2週間投与したところ、GVS(gas volume score)が投与前に比して有意に改善したことが報告されている。

2. 心血管術後の誤嚥性肺炎と嚥下障害の発生(二重盲検無作為化比較試験)²⁾：

心血管術後患者に半夏厚朴湯を2週間投与したところ、プラセボ群に比して誤嚥性肺炎の発症を有意に抑制したことが報告されている。

半夏厚朴湯の要点 (図10)

半夏厚朴湯の最も重要なポイントは気滞であり、さらに気逆がある場合に用いる。症候としては、梅核気(咽頭違和感)、気が上昇しているために出現する躁傾向、咽頭に痰が絡む、気の流れが悪くなるために津液の停滞が生じて、それが痰として出現してくる。呼吸に症状が現れると咳嗽、腹部に症状が現れると腹部膨満感となる。

柴朴湯は小柴胡湯と半夏厚朴湯を合わせた処方であり、気滞・肝気鬱結の症状、さらに脾気虚の症状にも対応する。

加味逍遙散は、肝鬱化熱に、さらに肝脾不和、血虚血瘀の症状が存在している場合に用いる。

抑肝散加陳皮半夏は、肝風内動に用いる抑肝散に、陳皮・半夏を加えることで気滞、肝脾不和にも有効である。

柴胡加竜骨牡蛎湯は、肝火の症状と、それが心に影響するため過覚醒、興奮、不眠、動悸、不安、焦燥などの症状に用いる。

加味帰脾湯は、心血虚、脾気虚に加え、心熱、肝鬱気滞の症状に用いる。

図10 半夏厚朴湯の要点

- 気滞(＋気逆)：梅核気(咽頭違和感)、躁傾向、咽頭に痰が絡む、咳嗽、腹満

≪他の処方との鑑別点≫

柴朴湯：気滞、肝気鬱結(イライラ、抑うつ)、脾気虚(下痢、軟便、腹痛)

加味逍遙散：肝鬱化熱(イライラ、のぼせ)、肝脾不和(腹痛、便秘/下痢)、血虚血瘀(眼の疲れ、爪が脆くなる、月経痛)

抑肝散加陳皮半夏：肝風内動(震え、感情失禁)、気滞(上腹部不快感、抑うつ気分、嘔気)、肝脾不和(便秘/下痢、腹痛)

柴胡加竜骨牡蛎湯：肝火(イライラ、易怒)、心への熱の影響(過覚醒、興奮、不眠、動悸、不安、焦燥)

加味帰脾湯：心血虚(病的不安感、熟睡障害、動悸)、脾気虚(食欲不振、軟便)、心熱(入眠困難、焦燥)、肝鬱気滞(イライラ)

参考文献

- 1) Oikawa T, et al.: Evid Based Complement Alternat Med. 6: 375-378, 2009
- 2) Kawago K, et al.: Ann Thorac Cardiovasc Surg 25: 318-325, 2019